

慈濟

ものがたり

ツーチー 2020年6月 282





— 證嚴法師の『今日の言葉』 —



生態を守り、衆生をケアする

天秤の動きのように善悪が綱引きした時、

善が弱いと浮き上がり、悪に強く傾きます。

防ぐには悪に向かわないよう心を護るしかありません。

慈悲喜捨の気持ちでバランスを取り、

愛のエネルギーで生態を守り、衆生をケアするのです。

● 扉の言葉 文・證嚴法師 絵・凌宛琪 訳・済運



窓外に緑が映える中、一人の母親と女の子が台中市立図書館李科永紀念図書分館で本を読んでいた。大衆が読書に親しむようにと、近年、図書館や学校、民間団体が積極的に投入し、読書が習慣化して新しい時代へと変わること期待を寄せている。
 (撮影・経典雑誌撮影主任 安培得)



慈濟日本サイト

目次

【編集者の言葉】	万物との共生を自覚する	慈願／訳	4
【やれること】	他人に力を与え、自分の心を守る	明陞／訳	8
【世界に目を向ける】	大愛で福を造り、善行する	濟運／訳	10
【主題報道】	読書のビジョン 図書館進化論	濟運／訳	16
【推薦新書・『本はこうやって読むもの』】	呼吸や飲食と同じくらい大切な「読書」	陳美卿／訳	46
【国際慈善 ラオス】 (下)	仏の国 ラオス	心嫻／訳	52
【證嚴法師のお諭し】	謙虚に祈り、人間に利益をもたらし、 斎戒菜食で、心の欲を征服しよう	慈願／訳	66
【行脚の軌跡】	因果関係を重く見る	濟運／訳	75
【骨髓バンクで繋がる愛】	海を渡ってあなたに会いにきました	常樸&明湑／訳	82
【特別報道 慈懿会】 (下)	異郷の父母	慈願／訳	98
慈濟大記事【五月】		濟運／訳	106

万物との共生を自覚する

「微生物の存在する世界に身を置く私たちですが、どこにいるのかを確実にすることはできません。畏敬の念があつてこそ平和裏に共存でき、人と万物の間で謙虚さを学んで初めて平穩無事でいられるのです」。十七年前サーズ危機が世界を襲った時、證嚴法師は、「今回の疫病は人類に『傲慢であつてはならない』という教訓を与えた」と語ったことがある。

現在新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は世界中に拡大している。五大洲の中で僅かに南極大陸だけには波及していないが、その勢いはまだ止まらない。将来は流感のように、毎年気温が低くなると感染が拡大することを予言する人もいる。これは人類の健康福祉に課された厳し

い試練である。

しかしながら人が集まる所なら、伝染する可能性があり、また、必ずしも症状が出るとは限らず、防疫をより困難にしている。多くの科学者は、人がウイルスと平和に共存することを学ばなければならないと警告している。

人類が農業から畜産業を発展させると、人と家畜の接触が一大病原になった。また、過度な開発によって人が野生動物と接触する機会が増え、人と人畜に共通する病気が増加した。「病気」は微生物によって引き起こされるが、微生物と生命体は元より「共生」という密接な関係にある。

当初はこの新型コロナウイルスがコウモリに由来すると見られていたが、生態系の中でコウモリは実は虫害を抑える益獣でもあり、そのうち果物や花粉を食べる数種類は、植物の受粉媒介を促進して森林の形成にも一役を担う。その結果、人類に数多くの天然資源を提供しているのである。

歴史学者のマクニールは一九七六年に『疫病と世界史』という著書の中で、「疾病は人類の文明発展に変化をもたらし、また医薬技術の進歩を促している面もあるが、人は依然、ウイルスの変異と戦い続けなければならない」と表した。

疫学の観点から見ると、ウイルスの感染力・薬剤耐性・環境適応性が強まる場合、或いは宿主の免疫力低下、接触による感染率増加、劣悪な衛生環境、生態系の破壊、人心の動揺等のすべての要素が疫病の爆発的な流行の原因になりうる。

「共生する」ことを実際に深く認識してこそ、私たちは心を落ち着けて対策を考えることができるのだ。個人が行う予防策にはこまめに手洗いして大勢での集会を避ける等があるが、それを相互に注意喚起し合えば有効な防護ネットを織りなすことができる。そのように人と人の間に「共生」という観念を打ち立てる必要があるのだ。

台湾全土の慈濟病院は感染症が発見された時、直ちに防疫の強化に乗り出した。医療ボランティアは普段の活動を取りやめ、病院の入り口で訪問者に防疫措置を施す手伝いをした。花蓮慈濟病院では定期的に薬を取りに来る慢性病患者のため並ばずに薬が受け取れる予約制の窓口を設置した。台南のボランティアは、生産性を上げるためにマスク工場で包装を手伝い、中国のボランティアも防疫対策最前線の医療機関を支援して、防疫物資や防寒衣類などを送り届けた。

これらの行動によって、我々は衆生と源が同じであることを教えられ、万物共生の道理をより深く体得した。（慈濟月刊六四一期より）

他人に力を与え、自分の心を守る

最

近の生活では、マイ食器やハンカチのほか、マスクが肌身離さず持ち歩くものの一つになっている。

マスクで濾過したウイルスから身を守っても、心の方はどうだろうか？ふと「悲」という字を慈済手話で表現する時、「マスク」のような形だったことを思い出した。大慈悲心を持っている人の多くは、困難が大きくても恐れず奉仕してい

る。医療スタッフにしても多くのボランティアの行動にしても然りである。

個人の日常での慈悲の行動にはどういふものがあるだろうか？飲食の選択をする時、菜食も一つの方法だと思う。近頃はコロナウイルス感染症関連の報道が目立っているが、動物たちの恐怖とやり切れない気持ちを、人類は今、正に実感しているのだと言える。



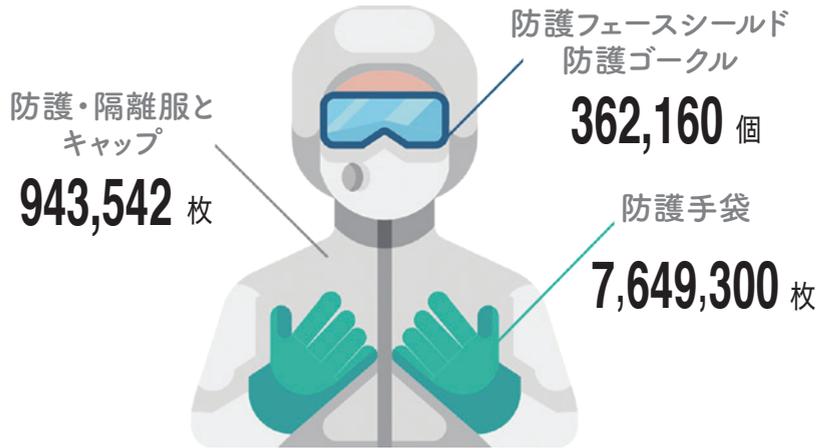
多くの活動がキャンセルされているのを聞いて思うのだが、それは実は読書する時間が増えたということである。またオンライン講座に参加することで心を落ち着けることもできた。毎日社会の話題に注意しながら、證嚴法師の「今日の言葉」のイラストを描き、午後の祈りにも参加している。安全な範囲内でやれることをやるまでである。

感謝の気持ちを表して人の愛を受け入れること、愛で思いやることを学べば、人に温かさを与えられると同時に、自分も強くなれるのである。

(慈済月刊六四一期より)



2020年6月8日現在、慈濟は台湾国内以外に67の国と地域にCOVID-19用防疫グッズを支援。



医療用マスク
9,915,374 枚



布マスク
222,282 枚



消毒用アルコール
47,349 L



待機者への安心福袋
63,366 袋



健康菜食弁当
85,561 食



福慧ベッド
5,175 床

世界に目を向ける

大愛で福を造り、 善行する

◎ 訳・済運

慈濟は世界63の国と地域に支部があり、新型コロナウイルス感染症が発生すると、各地の慈濟ボランティアは感染拡大予防の行動に出た。愛の寄付金で防疫グッズを購入し、各地の第一線にいる防疫機関や貧困者に寄贈した。ウイルスは対象者を選ばないが、大愛の支援にも待遇の差異はない。

新型コロナウイルス感染症が社会の経済面に与えるインパクトによる個人や家庭の困窮に対応して、慈濟本部は「大愛で福を造り、善行する」と題したケア活動を始めた。5万世帯の生活困窮者家庭に対して積極的に支援する他に、一般大衆からの報告も受けつけ、感染症の影響で突然収入が途絶えた家庭を支援している。

支援範囲

長期的経済支援、緊急生活支援、学費補助、医療ケア及び支援、家屋の修繕、心のケア



慈濟グローバル
ネットワーク



オンライン
寄付

クリック募金



マレーシア

◎文・林麗珍（マレーシア『慈濟世界』月刊誌編集長）
撮影・梁倩宜（セランゴール慈濟ボランティア）

仕事に行けず困窮した難民に 食糧を届ける

マレーシア政府が外出制限令を発令したため、多くの難民が仕事を失った。仕事がなくては食べていけない。3月25日、ボランティアは慈濟セランゴール支部と国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）が共同で運営している2つの難民学校の学生40世帯に1ヵ月分の食糧を届けた。



慈濟ものがたり

アメリカ

感染症予防期間中、 生活困窮者家庭への食糧支援を継続

「本当にありがとう！」とアメリカ・南カリフォルニア民衆教育協会（DEPSCA）の責任者であるメーガン・オルティスさん（左から2人目）が何度も礼を言った。

2018年カリフォルニア州で起きた山火事の後、慈濟は低所得者の世話をしているDEPSCAと共同で中長期再建目標を立て、庭師や家政婦、清掃員をしていた出稼ぎ労働者の家庭が生活を維持できるよう支援した。

今年3月、アメリカは新型コロナウイルスの感染拡大で、多くの業種で会社が営業を停止した。元々貧困ライン以下に属していた移民たちは収入を断たれ、食糧を買うことさえできないほど困窮した。カリフォルニア州の「外出規制」発令前に、ロサンゼルス市の慈濟ボランティアは急いで米やトウモロコシ、豆類、シリアル、野菜や果物の缶詰などが入った1週間分を超える大愛食料パックと新鮮な野菜を50世帯に届けた。カリフォルニア州だけでなく、全米各地の慈濟ボランティアは同じように外出規制が始まる前にできる限りの食糧を配付することで、経済的に弱い立場にある人たちが今回の感染症を乗り切れるよう支援した。



◎文・錢美臻、何憶萍（ロサンゼルス慈濟ボランティア） 撮影・趙嘉鑫

中国福建省

◎文・黄德欣（アモイ慈濟ボランティア）

感染者隔離用ホテルが倒壊 救助前線を支援



（撮影・黄德欣）

3月7日夜、福建省泉州市で新型コロナウイルス感染者隔離用ホテル「欣佳酒店」が倒壊し、70人余りが閉じ込められた。福建省の慈濟ボランティアは捜索現場の立ち入り禁止区域外に拠点を設け、24時間体制で炊き出しを行うと共に、直ちにアモイ市、福鼎市、福州市、江蘇省昆山市の慈濟人と連絡を取り、エコ毛布と福慧ベッドを確保した。「最初、救助の前線から戻って休憩した時は地面に寝るしかありませんでした」と救助隊員の劉さんが言った。「今は折り畳み式ベッドと暖かい毛布があるので、随分助かっています」。5日間、慈濟は560食の炊き出しと福慧ベッド246床、毛布760枚、エコカップ3千35個を提供し、3月12日の捜索終了まで支援を続けた。（慈濟月刊六四二期より）



（撮影・範盛花）

「図書館進化論」 読書のビジョン

窓の外に緑が映える中、一人の母親と娘が台中市立図書館李科永紀念図書分館で本を読んでいた。大衆が読書に親しむよう、近年、図書館や学校、民間団体は積極的に投入し、読書が習慣化して新しい時代へと変わることを期待している。



撮影・安培溥（経典雑誌撮影主任）
文・呉佳珍（経典雑誌編集者）
訳・齊運

5.2 冊。文化部の統計によれば、

台湾国民が昨年一年間に読んだ本の平均数は5.2冊で、アメリカの1.2冊、韓国9.1冊、日本の8.3冊に遠く及ばない。この数値は驚くに値しない。しかし、次の数値は信じられないかもしれないが、事実である。国立図書館

● 新北市立図書館総館は台湾で唯一24時間営業している公共図書館である。館内には「世界の窓・読書コーナー」が設けられ、日本の禅を模した作り（右上）やアメリカ・ヤッピー風など異国情緒豊かである。自習コーナー（右下）と視聴コーナー（写真左）は休日には満員になる。



の統計によると、昨年、台湾国民が各地の図書館を訪れた人数は延べ9198万人余りで、一昨年より6・7%増えている。そして本を借りた人は2167万人で5・7%増えた。一人当たりの平均は3・3冊で、0・1冊増えている。この数値を見る限り、まだ増える余地はあり、台湾の公立図書館の努力の成果が現れている。

本を身近なものにし、読書と学習に対する願望を呼び覚ますために、図書館や学校、民間団体は近年、変革を起こしている。図書館は本を借りたり読んだり、一つの椅子に座って読書するだけの場所

射しであり、更にも上を見ると、圧迫感を与えるグリッドシステム天井ではなく、網の目状に張り渡された黒い鉄枠と古い倉庫を模した梁から照明器具が吊り下げられている。イギリスの大学のような風格を持った自習エリアで読書すれば、賢くなる気がする。

そこに八年間勤務した新北市立図書館秘書の陳文増氏によると、二〇一七年に改修工事が終わってから訪れる人は20%増え、空間の改善が大衆を惹きつけていることを表している。「以前は空間が狭かったのですが、今はかなり余裕ができ、訪れる人は増え続けています」

ではなく、生命体のように絶えず進化しているのである。

空間の改造で大衆を惹きつける

もし長い間、図書館に出入りしていなければ、信じられないかもしれないが、「図書館がどう変化できるというのか？」と言わず、先ず新北市立図書館板橋江子翠分館を見てみよう。

復古調の赤レンガ三階建ての建物に入ると、6Mの高い天井と太い梁が目に入り、開けた視野と共に壮観さが感じられる。明かりは半円形の窓から射し込む陽

と江子翠に四十年間住んでいる、年輩の読者且つ図書館ボランティアでもある顔イエン燕イエン玉ユさんが笑顔で説明してくれた。

次に、個人の寄付によって一年前に建てられた台中市立図書館李科永紀念分館に目を向けてみよう。三十七歳の主婦、蔡珮琪ツァイペイチさんが乳母車を押しながら三歳の娘を連れて入ってきた。女の子は窓の外を指して「ママ、公園で遊びたい！」と言ったが、逆に絵本を数冊持ってきて、床に座って読み始めた。

「一階に児童コーナーがあるので上に行く必要がなく、とても便利です。子供たちは自由に振る舞うことができ、多少



● 新北市板橋江子翠圖書館的自習コーナー（左上）は改装後、以前の単調で味気ない場所（写真右）からドラム缶の椅子やパレットを形取った本棚が出現し、一体的に現代風の軽工業様式を醸し出している（左下）。（写真右・新北市提供）

声が大きくても読書している他の人の迷惑にはなりません」。蔡さんはママ友サークルの推薦でこの素晴らしい場所を見つけた。

公園脇にある李科永紀念図書分館は、一部を吹き抜けにし、窓を大きくして外の景色を取り入れることで、緑と日差しが入るようになった。

また、今まで図書館が使用していた白



色蛍光灯から温かみのある照明に変えたことで、平日に子供連れの人が増えたばかりでなく、休日にもお年寄りや子供を連れた人を多く見かけるようになり、平日の倍の人数になった。板橋江子翠分館であれ、李科永記念図書分館であれ、これら図書館が変化したのにはそれなりの理由があるのだ。

一から全体的に企画し直して新築された李科永記念図書分館に比べ、三十六年の歴史を持つ板橋江子翠分館（元・新北市図書総館）の場合、改修するに当たって、徹底した整理と共に、限られた空間で最も効率的な運用を考えなければなら

陳氏は三つの重点を指摘した。役割の位置付け、年齢や大衆層による利用の区分け、ユニバーサルデザインの三つである。板橋江子翠分館を例にとると、「分館」とは言っても、自習型の「閲覧室」ではなく、所在地域の蔵書を守る責任を担う場所と位置づけ、用途に応じて区分けすることにした。三階を静かな読書コーナーにし、二階は「声を出してもよい」子供の閲覧室や新聞、雑誌を読むコーナーにしている。

またユニバーサルデザインを取り入れ、バリアフリーと目的地に到達し易い空間設計を実現した。例えば、本棚と本

なかった。

その分館は戦後の第一世代建築士で、台北市立美術館を設計した高而潘氏ガオアルパンが手がけたものである。当初は台湾の現代主義建築の意義を証明すると共に、実用性を考えた結果、元来の特色が余分な装飾の裏に隠れてしまっていた。そこで改修工事した時、グリットシステム天井やカーテンボックス、間仕切りなどを取り外し、新たな配置や採光の設計し直して、元来の伝統的な容貌を取り戻すと同時に、今風の軽工業風に仕上げた。

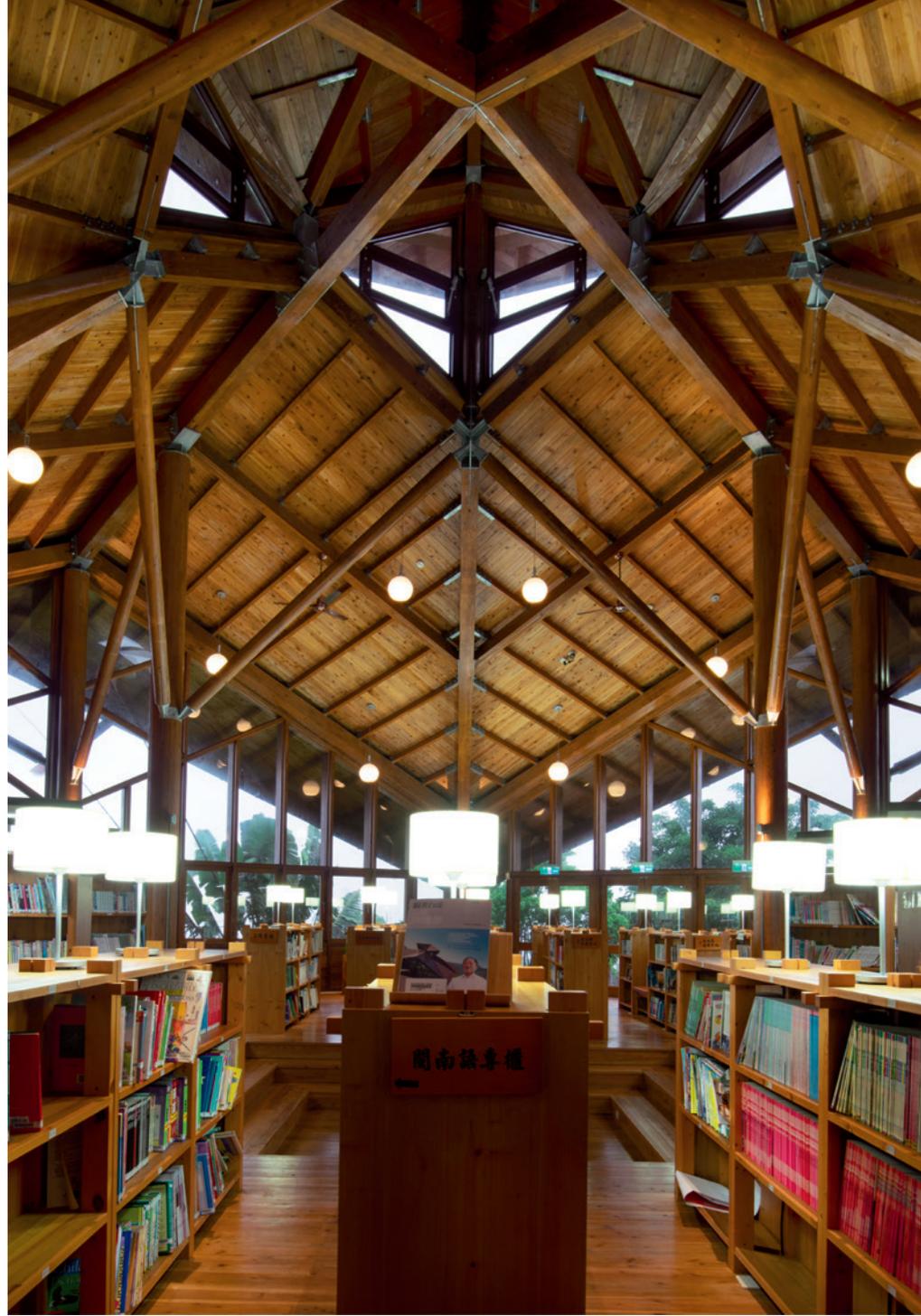
図書館は美しさと共に実用性も兼ね備えていなければならない。改築する時、

棚の間隔を110〜120cmにすれば、車椅子や乳母車が通れ、出入口口に55cm以上の空間を設ければ、人の流れがよりスムーズになる。伝統的な図書館をリフォームして現代風にすれば、図書館は薄暗くて味気ないというイメージを一掃することができる。生まれ変わった図書館は大衆を惹きつけると共に地域の活性化にも繋がっている。「ランドマークとして宣伝し、そこで楽しむのもいいと思います。まずは人々に来てもらって、読書を身近なものにしてもらうのです」と台中市李科永記念図書分館ジユオシユエーリンの卓淑玲主任が言った。

倉庫からランドマークへ 変化と一貫性

図書館がいつ頃、どこで出現したのかは分からないが、元来の目的は文化の保存であり、エジプトや中国などの古代文明を持った国が初期の図書館の発祥地であろう。かの有名なアレクサンドリア図書館はギリシア文明の紀元前三世紀初頭に建てられたものである。

●環境に優しい図書館が近年の建築の趨勢になっている。高雄市那瑪夏区民権小学校図書館（写真右）、台北市立図書館北投分館（写真左）は、共に台湾グリーン建築最高等級の「ダイヤモンド級グリーン建築」の認証を受けている。（撮影・劉子正）



後期古代ローマはエジプトとギリシア

の影響を受け、図書館が発展を遂げた。初めは貴族が対象だったが、ローマ文明の最盛期になると、数多くの図書館が民間に開放されるようになり、それが公共図書館の始まりとなった。

台湾の公共図書館に戻って見てみよう。昔は少数の統治者や知識層が独占し、公共図書館は日本統治時代の初期（一九〇九年）以降、民間のアイデアで西洋式蔵書機関として設立された。しかし、大規模な建設は一九八〇年代に政府が推し進めた「十二項目建設」と「台湾省文化建設補強重要措置」の二大政策が始

方の人もいれば、「破壊」は「建設」の契機だという人もいた。

台湾師範大学図書資料学研究所の陳昭珍^{ジヤオジン}教授は、近年の台湾図書館改革に参加したことがあり、当時、再建する方法を考えていた時、ある考えが脳裏に浮かんだのだそうだ。

それは友人が彼女に語った話に端を発する。「シンガポール政府の役人は誠品書店^{セイ}の読書空間を賞賛し、出店を招聘したことがあるのです。その後、出店計画は実現されませんでした。シンガポール政府は『誠品』を見做って全国二十数カ所の図書館を改装しました」。

まっつてからであった。

二十三年間図書館に勤めた経歴がある陳氏によると、初期の地方図書館は本を貸し出す蔵書倉庫に過ぎなかった為、その多くは「特に設計の必要はなく、高さの異なる本棚を買えばそれで済む」という考えであった。それ以上考えることをしなかったため、倉庫のような場所になってしまったのである。

図書館空間のリフォームについては九二一大地震後の再建から話さなければならぬ。当時、中部の図書館は全て損壊または倒壊した。再建方法を話し合うと、本を購入すればいいという古い考え

その後、陳教授は現地に行つて視察し、温か味があつて明るく、立体的な空間や変化に富んだ本棚と木の床を導入することで、人々にリラックスして読書してもらう、「誠品」的な雰囲気を感じ取ることができた。ここでは異なつた民族の人たちが読書したり、ネットで閲覧したりしていた他、大人が子供に物語を読んでも聞かせていた。「台湾でもこういう図書館ができないだろうか？」と彼女は思った。

⑤誠品書店：台湾の有名な大型複合書店で、日本の蔦屋に類似した斬新的な読書空間を提供している。

陳教授の当時の考えは二〇〇二年に政府が推進した「整理地区公共図書館運営管理計画」の方針に採用され、町や村役場と読書に関心を持つ地方の有志に提案して評価された後、最終的に台中市霧峰区、嘉義市竹崎郷、南投県埔里鎮等九つの図書館の再建に採用された。

一回目の認可により模範的な改良が行なわれると、政府が引き続き「公共図書

●山奥で読書を広めるには民間の力が欠かせない。静思書軒が設立した「静思読書書軒」（写真右は台東三仙小学校）や花蓮県新城小学校野球チームのコーチ胡文偉が作った「練習曲書店」（写真下）は、現地の生徒に恩恵をもたらしている。（写真右、静思書軒提供）



館強化計画」、「読書習慣と空間改造」などを進め、台湾の公共図書館は以前の堅苦しくて近寄り難かった場所と違ったものができるようになった。

近年、台湾各地でより現代美学にマッチしたものができ、環境に優しくて使い勝手のよい現代的な図書館が建てられている。著名な台北市立図書館総館、高雄市立図書館総館、新北市立図書館総館などの他、将来は台南、桃園、台中、新竹などでも「国際的なランドマーク」となるような図書館が出現する予定である。

しかし、ランドマーク級の図書館を建設することが即ち「読書力の向上」に繋

維持することができるのです」。

図書館が何度も変革された後、「蔵書倉庫」から今あるような「生活に溶け込んだ図書館」になっても、読書の本質を推奨することを忘れてはならない。だが何故読書を推奨する必要があるのか？その意義はどこにあるのか？

「読書はあなたの世界観、価値観を形成し、果てはあなたの運命までをも決めてしまうのです」。読書を愛する著名人であり、PCHome 24 購物の董事長でもある詹宏志（ジャンホンジー）はこう語っている。「今でも読書は新しい物事を学んだり、理解度を試す重要な役割を果たしています」。

がるのか、または「目に見える功績」だけに終わってしまうのかは分からない。今までの台湾の公共施設には、多くの人が観光名所として訪れても、人々の心に感動を与えないため、最終的には誰も使わないものになってしまったのも少なく無い。

「しかし、それもいいかと思うのです。というのは、そういう状況が県知事や市長の目にとまるからです」と陳教授が言った。「しかし、それが単に誰それがしたから、私たちもしなければという考えに留まってはならず、建築物と専門人員を編成して初めて、良好な読書環境を

同様のことをマイクロソフトのビルゲイツ会長も述べたことがある。少なからぬ国は読書力を国力の一つとみなし、立法で読書を勧めていることは言うまでもない。アメリカを例にとれば、「読書卓越法案」があり、日本には「子供の読書活動の推進に関する法律」がある。

山奥での読書は希望に繋がるのか
失望になるのか

今まで山奥や離島の子供たちにとって、読書環境は明らかに大都会よりも劣っていた。綺麗な建物や快適な内装の



●台中市立図書館新社分館の移動図書館車は主に新社、太平、和平区にある山奥の小学校と病院を巡回しているが、道中殆どが山道である（写真右）。この日、訪問した中和小学校は全校で17人の生徒しかいないが、子供たちははしゃぎながら本を借りていた（写真上）。



図書館がなかったため、各方面の善意の人々は両者間の距離を縮めようと努力している。

台中市新社區中和小学校で子供たちが校門までやってきた。重くて大きなカバンを持った子供もいた。二週間に一度、移動図書館車がやってくる時間だからだ。その山間部にある小さな小学校の全校生徒は僅か十七人で、隔世世帯が多く、大人たちは仕事に忙しい。学校と共に移動図書館車は子供たちにとって知識の源泉なのである。

ここ数年、図書館は田舎に向き、あらゆる所に読書習慣が行き渡ることを期

は百二十カ所を数えるようになった。それぞれ書軒は五百冊の書籍とビデオを備えており、不定期に書籍の入れ替えや講座を行なっている。「子供たちの心に真善美の種子が芽生えることを期待しているのです」と静思書軒の総責任者である蔡青児ツァイチンアルさんが期待を述べた。

しかし、このような心温まる読書資源が長く有効的に運用されることができかどうかは、建物や設備ではなく、専門知識を持った人材に係っていると言える。台湾師範大学の陳教授によれば、温世仁基金会は毎年、三百冊の新書を田舎の小学校に寄付してきたが、三年後に訪

待している。台中市立図書館新社分館移動図書館車の責任者である廖淑芬リアオシューフェンさんは、毎日二つの場所に行くが、九十キロほどの道のりは曲がりくねった山道である。今までの七年間、彼女は子供たちが成長するのを見届けてきた。「何人かの男の子は漫画しか借れないので、文字のある本を勧めました。少しずつ言い聞かせるしかないのです」と彼女は笑顔で言った。

公共図書館だけでなく、少なからぬ民間の非営利団体が田舎に読書習慣を広めている。例えば、静思書軒は「静思読書軒」を山奥や離島の学校に設置しており、二〇一七年に始まったが、昨年末に

れてみると、新書は封をしたままだった。原因は学校側に図書を整理する人手が足りなかったためであり、資源は無駄になったのである。

図書館も書籍も静態的なもので、そこに入って本をめぐってみなければ、「読書」という行為は存在せず、読書する習慣が身につくことはない。鍵を握っているのは「指導する人」である。特に今のように「一人に一台のスマホ」では、親も子も「スマホいじり」に夢中で「読書」していないのをよく見かける。もし、大人さえも読書しなければ、どうやって子供に読書を勧めることができるだろうか？



一緒に本を読み、
スマホいじりしない
習慣を身につける

新北市北新小学校は昨年、「コミュニティ読書コーナー」を設置した。設置の理由の一つは親たちが子供に付き添って読書しようという呼びかけだった。

放課後、渡り廊下の横にある教室に設置された読書コーナーは子供と大人で賑わい始めた。「親を待つ子供や宿題をする子、または祖父と孫と一緒に本を読む姿などが見られ、スマホを弄る大人は僅かでした。朝の六時から夜の十時まで開

いていて、生徒や父兄、地域住民すべてが利用でき、いわば親子教室になっているのです」。

「学校とコミュニティの読書コーナー」プロジェクトは教育部から補助が受けられるため、小学校から高校校まで各学校の図書室や使われていない空間を活性化するのに役立っている。先生や生徒に学習の機会を与えると共に、地域住民にも学校の図書室を開放している。二〇一七年から二〇二〇年度まで749

●基隆市仁愛小学校の図書館は生徒が放課後に家に帰るのを忘れてしまうほどの場所である（写真右）。司書教諭の林先生は多角的に読書することを推し進め、指導した結果、生徒は自主的に知識の探索をするようになった（写真左）。

校に補助金が出るのが決まっております、それは台湾全土に及んでいる。

「政府のアイデアが善意であつても、大事なのは『一緒に読書する』ことであり、それが『集会の場』となつてはいけないのです。本来の読書を広める目的が失われたら、とても勿体無いと思います」と陳教授は呼びかけている。

屏東出身の彼女は、高校時代教育体制に失望したことがあり、その時味方したのは「机の下でこっそり読む本」であつた。それは彼女が四十年間図書館係の仕事に就いた由来でもある。読書を広めるためには、公共図書館に頼るだけでなく、学校

で読書人口を増やさなければならぬ。

近年、多くの小中学校で「朝の読書」活動を行つており、朝の自習時間に十分から十五分間を割いて、クラスの図書コーナーや学校の図書館から選出した本をクラス全員で読んでいる。勉強としてではなく、読んだ本の数も問われない。しかし、そうやって読書の時間を持つても、絵本や自分の好みの本だけを見たり、他の知識性のある本には手を出さないような「偏った読書」にもなり易い。

「ですから、読書は学習と結び付いたものでなければなりません」。これは陳教授が近年、小中学校で「司書教諭」を

押し広める理由の一つでもある。欧米や日本で長年行われてきた「司書教諭」とはどんなものなのか？基隆市仁愛小学校を例に取ってみよう。

資源以外に運用する人が必要

「先生、ダイヤモンドを研究しているのですが、どこかにありませんか？」運動場脇で数人の生徒が楽しそうに行ったり来たりして地面を見つめていた。その十分前、司書教諭の林心茹^{リンシンル}先生は「先週、鉱物の専門家が講演に来た時、持ってきた岩石を注意して観察しましたか？」と

質問したばかりだつた。生徒たちはまぢまぢに感想を述べ始めた。続いて林先生は彼らを一階に行かせ、「各チームに一つ研究用の石を拾つて来てください。本を読んだりネットで調べたりする以外に、实地に観察するのも研究課題の資料になるのですよ」。

これは六年生の「図書情報科目」にある研究活動で、今学期は自然科学と合わせて「岩石と鉱物」を研究課題にしている。あなたは、これと読書に何の関係があるのか？と思うかもしれない。「一般教育は子供に読書するよう学ばせませんが、読書する中で学ばせることは余りあ



●新北市立図書館の移動図書館車は近年、巡回先を増やして、街中の電車や地下鉄の駅のような交通の要点にも出向き、通勤者が簡単に本を借りて読書が生活の一部になるようにした。

りません」。テーマ研究は読書を通して子供を知識の追求へと導いている、と彼女が言った。

司書教諭の職務は、図書館の開け閉め、本の貸し出しや整理、生徒を図書館で読書させることだと思われがちだが、実際は四つの役割を担っている：教師、授業のパートナー、情報係、事務管理者である。他の専門教師と共同でテーマ研究の授業をする場合、授業のパートナーとしての役割はとても重要で、学期ごとに行われる一つか二つのテーマ研究は大方、自然、社会、語学、美術の科目を組み合

わせて行われている。

図書館を中心にした、領域を超えたこのような授業は、本と実地教育を通して行われ、生徒は探索、問題定義、資料探し、問題の解決方法、目標の設定、討論と協力をすることができるようになり、結果として個人または社会価値を作り出すことができるのである。

このような探求経過は一般の人の「図書館」と「読書」に対する認識を超えたものになっている。図書館の力強い後ろ盾となっている仁愛小学校の彭麗琦校長は、「読書自体が最終的な目標ではなく、

子供たちに自主的な学習能力を身に付けさせることなのです」と言った。

テーマ研究は通常、中高校生を対象にするものであるが、ある日、林先生は試みに二、三年生の子供を連れて潮間帯を研究することにした。思いがけず彼らは自主的に図鑑で調べて問題を解決したのである。「図鑑はやさしいものではないのですが、彼らは興味があったからできたのです」と、今年、優秀教師賞に輝いた林先生は、生徒が漢字と発音記号を混ぜて書いたテーマ報告を見せながら、少し自慢げに言った。教師は台上の賢者で

はなく、子供に付き添って導く立場にある。子供に行動を促し、彼らに資源を与えて学習を手助けするのがその役割だ。

台湾出版界のレジェンダリー人物である、大塊文化社の郝明義ホウメイギ董事長は、「時代の変革は読書の変革に始まる」と言ったことがある。図書館から読書へ、読書から学習へ、というように読書を好む国民は国を強くする。変革はいつも遅きに失することはなく、今からでも始められる。もつと読書のために図書館に向き、子供たちと共に本を読もうではないか。

(経典雑誌二五六期より)

呼吸や飲食と同じくらい大切な「読書」

娯楽から知識までを提供するマルチメディアは、次から次へと私たちの五感を刺激してくる。従来のいわゆる「読書」は今やジュラ紀の恐竜のように絶滅しつつあるのだろうか？

◎文・王志宏（慈濟人文志業センター書類出版部長） 訳・陳美卿

台湾の出版市場は、その売り上げが二〇一〇年の三百八十億元（約

千四百億元）からまるで雪崩なだが起きたように、二〇一七年には百八十五億元（約六百八十二億元）まで減少した。この数字は台湾人が一年間に購入する本の総

額だが、7-ELEVENの一月分の売上に過ぎない。台湾最大の企業である鴻海フォックスコンの二〇一六年の営業額四・五兆元（約十六兆六億元）と比べると、台湾全体の出版社一年間の売上を合わせても鴻海の一日半の収入（利益では

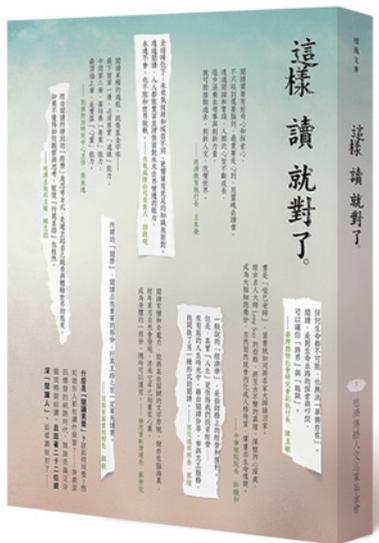
なく粗利）でしかない。

台湾の人口二千三百万人に対して、一年間に約四万種類の新書を出版することから換算すると、平均して五百七十九人に一冊の新しい本がいき渡ることになり、最も出版数の多い英国の三百二十五人に次ぐ数字である。もし十二歳以上に限れば、台湾人は年間平均して千三十六・九元（約三八十円）を使い、三・九冊の本を購入していることになる。しかし文化部の統計によれば、台湾民衆の二〇一八年の平均では五・二冊の本しか読んでおらず、アメリカの十二冊、韓国の九・一冊、日本の八・三冊に遥か及ば

ない。

マルチメディア時代に、読書により智慧を得る本というものを出版することは流れに逆らうことになり、螻蛄の斧にも等しいか、或は後の祭りの無力感の下での決断なのだろうか？

いいえ、私はそれほど悲観的ではない。私に楽観的などころがあるのは自分の読書経験からきている。実はこの文章を書くのにもペンを持って書いているのではない。三十年前から既にパソコンで原稿を書く習慣がついているが、文章を書くにあたっては、思考し資料を読むことを経てから筋道を立てている。このように



脳みそを絞ってからやっつと文章を書き出すことができるのだ。従って、本当に重要なのは思考を伴う読書なのである。

私たちは白紙の上に黒字で書かれたものを読むことを「読書」だと思いついてる。昔、読書は知識を吸収する数少ない手立てだったが、今やテレビ、映画、パソコンからケータイまで新時代の大小さまざまな伝達ツールが存在し、もはや白黒の文字からだけではなく、写真、映像と音楽など色彩と音が完璧に具わったマルチメディアで表わされ、直ぐ手に入る。しかもこれら娯楽から知識までのマルチメディア情報は、実のところ時空を超越した古今のごった煮であり、これ

器の入ったリュックを背負っても重さを厭うことがないばかりか、本を一緒

もかと私たちの五感神経を刺激してくる。それならば伝統的な所謂「読書」は、ジュラ紀の恐竜のように絶滅するのではないか？と思われるが、それは全く違う！

読書はプライベートという特質を持っている。小学校時代は書店の四郎真平、阿三哥大嬸婆、シャーロックホームズやルパン、中学時代はチャンバラや文芸小説、大学になるとノーベル賞作家のものや郷土文学等、読書は私にとって他人の人生経験における核心を吸収すると同時に知識の源でもあり、精彩な生命に趣をもたらず力を日常生活に添えることだと
言える。

従って、若い頃の私は、重い撮影機

に持ち歩いてきた。チベットに旅行した時もあちこちで束になった各県の社

22名のベテラン「読書家」による 自分と本との物語。 読書を好きになろう。

出版・慈濟檀施文庫
カスタマーサービス

☎ +88612128989000 内線2145



皆様のご支援をお待ちしております。ネットで「慈濟道侶檀施会」に入会の方には2カ月
に1冊本をお届けします。高僧伝系列の本も
その中に含まれております。

会歴史調査に関する資料を集めた。近代的な都市で取材する時は、書店で専門書籍を集める。今でも休暇の時は心置きなく何冊かの小説を選ぶ。普段は携帯を持っていても、ノートパソコンが入ったカバンには必ず一、二冊の本が入っており、重さは二の次で、要は本を持たないと不安なのだ。

紙の感触、印刷の匂い、本をめくる音、或は重要な記載のあるページの折り目、そして読んだ後に本を本棚に置くことは私の人生における重要な儀式となった。私はドイツ人の「本棚のない家は窓のない部屋に等しい」という言葉にいたく賛同している。本はある意味で、空気や食

物、水と同じくらい重要で不可欠な存在なのだ。

電子書籍と出版物の相互補助

出版物を閲読するほか、ネット上の文章や電子書籍の閲読はもはや仕事上で欠かすことができない。資料の収集や確認、メールのやり取り、写真の保存や修正、原稿の編集等だ。出版者である郝明義氏は電子書籍と出版物の閲読について興味深い分析をしたことがある。前者はマルチメディアによる具象が多く、活発で拡張的、社交的で細かいマルチタスクに富み、動的、陽性的性質があり、後者は文

字による抽象的な、静寂で慎ましく、独立して整った、線的、静態的、陰性的性質を持つという印象があるというのだ。彼は二つを昼と夜に喩え、昼に夜が加わって初めて完全な一日といえる、と述べた。

発表されたばかりの「二〇八教育綱領」では、過去のテキスト学習と試験重視の傾向から転換し、素養を高めることが単一教科書学習に取って替わった。「素養」とは一体何だろうか？政府の定義によると、人が「現在の生活に適応し、未来の困難に対応できる知識と能力、態度」を現わすもの、つまり一種の心の持ち様である。

言い換えれば、学校で勉強する「知識」以外に、これからの十二年義務教育では

学習する過程での「態度」も重視されることになり、新しい教育課程を通して、領域を超えた学習や生涯学習精神と同様に、学生たちにとってはこの知識に溢れた時代に必要な「能力」と「態度」を培うことが期待される。従って単なる知識の吸収で満足せずに、読書を積み重ねることが将来的には国民の備えておくべき修養になるだろう。読書は試験の為だけではない。持続する読書は自分の人生の為なのだ。読書が呼吸や飲食と同じくらい大切だ！と言われる時代になってきた。『這樣讀就對了（本はこうやって読むもの）』の序より）

（慈濟月刊六三九期より）

仏の国 ラオス

二〇一九年末、慈濟^{ツイヂ}の配付チームに同行してラオスを訪問した。配付の合間に田舎の大小様々な寺院を巡り、寺院の殆どの壁に仏教と関連性のある絵が描かれているのを見てきた。釈迦牟尼の成仏前の修行図や人間^{じゆかん}における生老病死、貧困や富裕層の暮らし、輪廻因果などで、それらの絵はいつも「善意を持つ」よう、人々に警告しているかのようだった。

インドシナ半島の内陸部に位置するラオスは、近隣のカンボジア、ミャンマー、タイ諸国の文化と相似しており、人民は主に南伝上座部



(小乗) 仏教を信じ、仏教寺院や橙色のけさを身にまとった僧侶が至る所で見受けられる。人々にとってその橙色は神聖な存在であり、寺院は人々の心の拠り所であるだけでなく、文化及び教育の伝承の重要な場でもある。田舎では重要な儀式やお祝い事は全て寺院に集まって行う。

国のシンボルであるタート・ルアン(前頁写真中央の仏舍利塔)からは仏教に対するラオス人の尊敬の念がうかがわれる。仏陀の遺骨を崇拝するために建てられたこの仏舍利塔は戦争で何度破壊されても再建維持され、今でも首都ビエンチャンに聳えている。

都会や田舎のどこに行っても、人に出会う度に相手は微笑み、両手を合わせて会釈する。水害支援の配付を手伝ってくれた現地の華僑・蔡華サイファージェー杰氏になぜ誰もがこのように自然体で信仰を取り入れているのかと尋ねると、「宗教に敬意を払うというよりも、むしろ既にラオス人の生活に溶け込んでいるのだと思います」と答えてくれた。

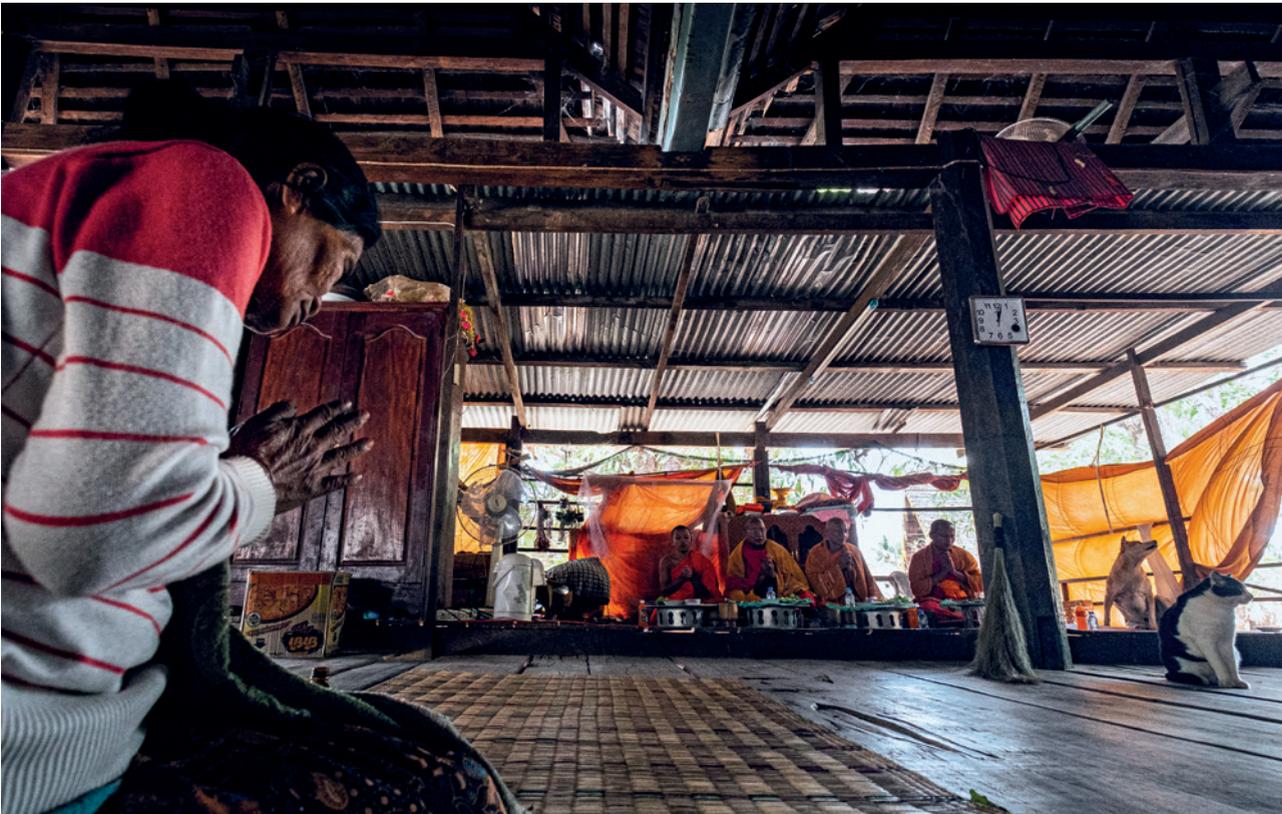
早朝に托鉢し、人々の施しを受け取る

古風な趣のあるサバイ寺院で、私はバウンマニ比丘ビク(Bounmany)を訪れ、ラオスと上座部仏教の関係について教えを請うた。

若いバウンマニ比丘は、「仏教が伝わる前、ラオス人の多くは民間信仰やヒンズー教を信じていました。十四世紀にファーム王がラオスを統一してランサン(Lancang)王国を建国しました。国王は仏教戒律が人民を統率して、平穏な社会を築くことができると信じ、仏教を国教にしました」と説明してくれた。

フランスの植民地時代には仏教は衰退したが、ラオスの仏教寺院は、絶えず知識の伝承と仏教の研究に関する重要な場であり続けた。とりわけ、上座部仏教は初期に民間信仰とヒンズー教が融合したため、田舎では神廟と寺院を同時に見ることができる。一般の家庭でも、仏壇と祭壇の双方が据えられている。





バウンマニ比丘は、「托鉢で受けた食べ物が多過ぎる時は、それを再度信徒に分け与えるので、人々は頂いたものに福があると思っています。また昼食は、寺院の近くの住民が寺院に持って行って供養します」と教えてくれた。

多くの国民は、「不殺生^{フセツシヨウ}、不偷盗^{フチユウトウ}、不邪淫^{フジャイン}、不妄語^{フモウゴ}、不飲酒^{フオンジュ}」という五戒を順守している。仏教を信仰する男性は生涯に少なくとも一度は剃髪し、短い場合で数日、長い人は数年にわたって出家し、住民の供養を受ける。彼らは朝の読経を終えてから、右肩から鉢を下げ、隊列を組んで托鉢に出かける。そして、交差点に出会うと、彼らは川の支流のように異なった方向に分かれて歩いて行く。

道傍では人々が老若男女を問わず敬虔に跪いて待ち、合掌してもち米（カオ・ニャオ）や果物、料理した食べ物などを鉢の中に入れ、そして僧侶が祝福の言葉を述べるのだ（前頁写真）。それがたとえ小僧であっても軽視することはない。蔡氏によると、それは全く普通であり、人々の心の中では修行僧は元々崇高であると思っっているため、全ての人は尊敬した態度をとるのである。

教育の機能を仏教寺院が補完する

剃髪はラオスの男子にとって生涯で一度だけの大切な行事であるばかりでなく、福と徳を蓄積する伝統でもある。貧しい家庭の子どもは学校に通えない。出家を選択するのは寺院で基礎教育を受けることができるからだ。

仏教寺院が教育に携わる由縁はずっと昔に遡る。ラオス中央仏教懇親会の主任であるプラ・ヨックカム法師は、「昔から仏教寺院での僧侶教育は基礎教育を施してきました。辺鄙な地域では学校が不足しているため、一部の学生は学校まで



十〜二十キロの道程を通わねばならず、義務教育にもかかわらず生徒のドロップアウト率が高くなります。従って、多くの人は地域の寺院で基礎教育を受けるために出家し、読み書き能力が身に付いてから、還俗して社会に戻り、一般教育を受けたり大学に進学したりするのです」と説明した。

寺院では、受戒した比丘が責任をもって沙弥しゅみにラオ語や仏教経典を教える。特に仏教経典には文学、哲学、医学、気象学に関する多くのチャプターが含まれている。また地域の状況に応じて、一部の寺院では英語、コンピューター関連、アジア文学などの追加コースもある。学歴を取得することはできないが、基礎教育を身につけることができ、また、都会には沙弥が進学できる仏教学院もある。

バウンマニ比丘は次のように説明した。二十歳未満の出家者は全員沙弥と呼ばれ、前述の五戒と共に、昼からの禁食、質素な身なり、歌や踊りを視聴しない、高座に座らない、金銀財宝を貯めない、という十戒を守らなくてはならない。沙弥として二十歳を過ぎたり、二十歳以降に出家した者は、比丘として受戒することを選擇できるが、二百二十七もの戒律を厳守しなければならない。

寺院の遺跡、時間と空間の凝縮

バクセ市を出発して一路南に向かい、約四十分走って高速道路を下りると、黄色い砂塵が舞う中、車両は小さな田舎町に入った。国連の世界文化遺産に登録されているこの千年の歴史を誇る「チャンパサク県の文化景観にあるワット・プーと関連古代遺産群」は、ラオス北部のルアンパバーンに続いて世界文化遺産に指定された地区である。

ラオスの言葉で「ワット・プー」とは「石の廟」の意味である。石畳みの通路の両側にはヒンズー教神廟時代の遺跡である石柱が聳えていた。まだらになった石壁には古代ヒンズー教の彫刻が仏像と共存していた。中央の軸を通る石の階段は急で狭く、それは、仏に敬意を払うために、参拝者には体を横向きにして登ってほしいからだそうだ。但し、王だけはそれを順守しなくてもよい。

ゆっくりと階段を上がると、ようやく山頂にたどり着く。山頂から壮観な遺跡を見下ろすことができる。歴代王朝から、フランス植民地時代、独立と内戦を経て今



日に至っているが、今なお人々の心の中の神聖な山であり、自然に対する敬意と敬虔な信仰の念を湛えている。

見渡す限りの青空を眺めていると、ラオスでの時の流れが格別に緩やかに感じられた。二〇一八年にダムが決壊し、二〇一九年には深刻な洪水被害が発生した。たとえ家が全壊し、苦しんでも、私が出会ったラオスの人々は楽観的な一面を見せてくれた。振り返ると、数々の記憶は映像のように、今でも鮮明に私の心に深く刻まれている。

ラオス全体の発展は、インドシナ半島の近隣諸国よりもはるかに遅れており、人々の苦難に対して無力感を感じるが、彼らはお金では買えないシンプルな生活に満足している。今後この国からあらゆる混乱と災害がなくなるよう、そして人々が日々、素朴で平穏な暮らしを続けていけることを願っている。

(慈済月刊六三九期より)

謙虚に祈り、じんかん人間に利益をもたらし、
齋戒菜食で、心の欲を征服しよう

齋戒で敬虔さを表し、世の平安を祈りましょう。

口の欲と欲念を克服して衆生と仲良く共生するのです。

大愛で福を造り、善行することは

一滴の水が注ぎ込んで大海を為すように、

やがて天下に潤いをもたらすでしょう。



近頃は毎日のように、新型コロナ
ウイルスに関する報道

が続いています。まるで切れた糸から落ちたビーズが拾いきれない速さで転がるように、瞬間に二百二十以上の国と地域に感染が広がり、人々を悲しみと恐怖に陥れています。この感染症で苦難に陥る人は多くなり、苦しみも増えています。

多くの国は街の封鎖や鎖国をして感染の拡大を抑えようとしています。交通の遮断によって往来が

できず、人々は用がない限り外出が禁止され、商業活動と日常生活システムが停滞しています。貧しい人は労働で生計を立てていますが、今は工場も閉鎖され、突然、仕事を失ってしまいました。収入がなければ、一家で飢えるしかなく、死活問題になっています。

この世の苦しみは疫病だけでなく、貧困の苦しみもあります。ホンジュラスでは低所得者が、慈済による台湾からの白米の配付で、感動の涙を流しました。お金のある人は我先に食糧や物資を買うことができますが、物価が高

の年齢に達しています。どうすればいいのでしょうか？そんな困難の中でも貧困家庭のためにボランティアは、家から曾て一緒に商売した友人に電話を掛けて物資と人手を調達し、ボランティアに外出許可証を申請しており、感染症期間中に八万世帯への配付を終える予定です。

私は感動と同時に弟子たちの苦勞に心が痛みました。このように困難な状況下でも、物資と人力不足だけを心配して勇敢に責任を担いました。その大量の米を配付し終えるのに何日も掛か

騰しているため、貧しい人には手が届かなくなってしまうました。最も緊急に必要な時に慈済の米を受け取ったのです。正に「命をつなぐ米」なのです。

貧困と失業、食糧不足は社会不安をもたらします。フィリピンの慈済人は三月下旬から米の配付を始めましたが、政府の行動制限によって、物資の購入や運送などに支障をきたしました。そして、年長者を保護するための政策によって六十歳以上の人は外出禁止となってしまうました。配付活動の経験が豊富なボランティアは殆どがそ

ります。私が「疲れましたか？」と言うと、彼らは「疲れましたが、個人的なことは小さなことで、大衆のことが一番大事です」と答えました。食べ物がない人はたくさんおり、自分は苦勞を甘んじて受けると言いました。

政府の規則に従い、配付現場では安全距離を保って行われました。住民が物資を受け取る時、前の人が一歩進めば、後の人が一歩進むという具合に、長い行列でも秩序正しく行なっていました。各世帯が持ち帰った米は一月分の糧になります。奉仕する人は愛を持

ち、受け取る人は規則正しくしており、彼らがそれを成し遂げたことに私は感服しました。

これが貧しい人に安心を届けることであり、飢える前に安心してもらえれば、社会に愛があることを分かってもらえるのです。奉仕する側が愛と勇気だけ持つていてもできることではありません。もし一人でも感染者が出れば、それは社会全体の不安になるため、「怖くない」と言うのではなく、万全の準備を整えてこそ、医療を支援し、貧困や病に苦しむ人をケアすることができるようになります。

く、一対大勢で話をし、大勢が話す内容を皆で聞くことができます。

ネットに繋がれば、何千、何万もの人が同時にオンラインで繋がります。マレーシアと視聴会議を開いた時、各地の映像を見ることができました。「静思堂にいるのですか？」と聞くと、「いえ、今は外出禁止で皆、家にいます」とのことでした。私は皆の家を渡り歩いたのです。

今回の感染症は全世界の慈済人の情を繋ぎ、長い間、会っていない旧知の間をネットで温めました。その時「マスクが手に入らない」「買えない

疫病は大災難。

世界中で発心し、配付することで人々を厚く保護しよう

今この時、世界の慈済人は各自の国に留まっても、心は台湾に集まり、「心の故郷」に帰っています。師弟はクラウド環境にアクセスして出会うことができ、それは神通力のようなものです。精神のエネルギーはネットを通じて繋がっています。科学技術の発達のおかげで、私は世界を巡ることができ、時には一日に二十カ国近い慈済人と話をします。一対一で話すのではな

いだけでなく、価格も高騰している。手に入らないので布マスクの作り方を学んでいる…」。

香港の慈済人の話によると、貧困世帯等にマスクを配付した時、あるお年寄りが「今、マスクは黄金をくれるよりも価値があり、家をもろうよりいい」と言いました。その実、貧困者が必要としているだけでなく、第一線で奉仕している医療や警察、消防関係者はもっと必要で、並んでもマスクが買えないだけでなく、防護服なども不足しています。

世界中の慈済人は至る所で医療物資

を探して配付しています。単純そうに思えるマスクの購入が思いもよらず、このように複雑になったのは、世界各国で需給が逼迫しているからです。ボランティアの中には全ての人にマスクが行き渡るようにとの思いで、工場の生産ラインの傍で待ち受け、受け取ると直ぐに発送しています。普段どこかの国で災難が起きると直ぐに支援を呼びかけるのと同様、今は世界中で発心し、世界中で配付しています。たとえ自らの手で布施できなくても、僅かな愛でも結集して奉仕しているのです。

日々、私の肩には天下がのしかかり、もありません。人の力で阻止することができないのなら、人々の真心こめた祈りをたのみにするばかりです。感染が拡大している時期に皆で集まることはできませんが、各家庭からオンラインで同時に祈ることはできます。敬虔な祈りと共に社会を利し、福を造る機会を増やさなければなりません。金銭や労力を出し、互いの愛の力を集結することで、人々の健康を守り、一地方たりとも感染症を拡大させてはなりません。

真心は目に見えないため、態度で表すことが大切です。齋戒菜食はその最

まるで天が崩れ落ちて来そうな気がして疲れると同時に憂慮に襲われます。一人ひとりが心して共に支え、真心を以て世界の平和を祈りましょう。平安を祈り、幸せを造ることは一滴の水がやがて大海に注ぎ込まれるように、天下を潤すことでしょう。

疫病を教育とし、世間の苦しみと人生の無常を知り、新たな方向に向かって進もう

疫病は人々を悲しませ不安にさせますが、それが何時まで続くのか知る由たる表現です。菜食には大きな意義があり、肉食を少なくしたり、しないこととで飼育と屠殺が減り、殺業（せつごう）を押さえることができます。衆生が業を作っているからには、衆生が共に懺悔し、謙虚に大自然を尊重し、自分の欲念を征服し、人と万物が相互に敬愛し労り合い、大地と衆生が共生し、融和することが必要です。

疫病の終息を願うには四つの方法があります。敬虔に祈り、福を造る機会を増やして社会を利し、生命を敬愛し、欲念を制圧することです。今この時を教育の機会と捉え、世間の苦しみ、生



因果関係を重く見る

因果関係を無視したり、気に留めず、今「好きなように」行動するならば、将来、一切の苦しみを「甘んじて受け」なければなりません。

◎文・釋徳侃／訳・濟運

自分に妙薬を処方する

二月二十五日のボランテニア朝会で、上人はご自身の幼い頃に起きた太平洋戦争のことに言及しました。「当時、私はまだ小さかったのですが、戦争が終わっても、将来、もっと恐ろしい災難が

命の無常を知って、速やかに人生の方向を変え、習気じっけを改め、善に向かつて学ぶのです。心念を変えさえすれば、安泰な生活を送ることができます。

数日前、常住尼僧たちは精舎で祈りを終えた後、募金活動に呼応しました。私はどうしてこんな沢山のお金があるの？と聞くと、普段から毎月千円を貯金しているので必要な時に献金することが出来ますと答えました。どんなことでも時を移さず実行し、奉仕する尼僧たちに感謝の気持ちがつのりしました。また慈濟病院や慈濟教育志業の

方々の導きにも感謝に堪えません。僅かなものが積もれば大きなものとなるように、毎日習慣になっているコーヒーも、一月の中で一杯だけ減らせば、それを貯めたお金で人助けができるのです。

疫病は一陣の台風のように押し寄せてきます。速やかに過ぎ去るように祈ると同時に復興の準備をする必要があります。共に大愛で福を造り、善行すること、災難が終息するよう祈りを捧げましょう。皆の精進を願っています！（慈濟月刊六四二期より）

降りかかり、『道に人影がなく、米を食べる人もいない』状態になるかもしれない、とお年寄りが心配していたのを聞いたことがあります。

「その当時は私には意味が分かりませんでした。今よく考えてみると、既に『人影のない道』が現実のことになっています。最近、中国では数多くの省や市が防疫のために町や村を封鎖し、人の出入りを制限しているため、道路は車がまばらで、行き来する人もいません」。

上人はこう強調しました。どんな方法で予防するにしても、一番大事なのは人々が自覚を持つことです。世を震撼させる災難が訪れたなら、それは人間への警告だと目を覚ますべきです。直ちに反省し、心身を引き締めてウイルスに感染しないよう予防し、その上で心を正して人々の心を落ち着かせる手伝いをするのです。「医療従

事者でなくても、伝染病に直面した時、人は皆、自分のために妙薬を処方することができます。それが齋戒であり、菜食することです」。

「最近ずっと『衆生の共業（多くの衆生が作り出した全体の業）』について話してきましたが、なぜ共業なのでしょう？それは過去から現在に至るまで、衆生は長い間、絶えず業を積み重ねてきたからです。口の欲について言えば、人は口の欲望を満たすために肉食し、それが習慣になってしまったのです。口の欲望のためにおびただし数の家畜を飼育し、それを食卓に供給しているのです。動物は元々人に食べられるもの、という偏った観念が出来上がり、その行為は益々偏ってきています。人口の増加に伴って、してはならないことをして、そうでなくては生きていけない人が増え続けており、業は益々重くなっています。衆生共業の報いが大自然の逆襲となって現

れているのです」。

人は天災を恐れ、飼育されている動物は人災を恐れ、いつ自分の番になって屠殺されるか分からないのです。人間だけが平穏な生活環境を求めるのではなく、動物にも自然環境の中で安心して生活できるようにしてあげるべきです」。

凡夫と菩薩の心の違いは、凡夫は「喜んで行い、甘んじて受け」、菩薩は「甘んじて行い、喜んで受ける」のです。「楽しければ何が悪い」という考えは、因果関係を無視して、それを恐れない態度であり、今「好きなように行う」ことで将来、一切の結果を「甘んじて受ける」ことになるのです。慈濟人は衆生の苦しみを助けるために奉仕し、どんな困難をも乗り越え、喜んで担い、苦勞を厭いません。皆さんが喜んで行う気持ちで以て、自分の健康を守り、防護措置を整えた上で、第一線に立つ防疫人員を支援しなければなりません」。

「ここ数日、皆さんに同じような話を繰り返していて、その道理は深いのですが、それを理解している人は多くありません。たとえ理解したとしても行動が伴っていないので、何度でも呼びかけて、皆が行動できるようにしているのです。衆生の共業の下では、健康を守るよう呼びかけなければ、感染の拡大を止めることはできず、私たち自身も守りきれません。斎戒を呼びかけ、地球上の万物の健康を守ることは自他共に利することであり、この世を守る方法なのです」。

慈濟で人生経験を積み重ねる

カナダの慈青の感想を聞いてから上人は、志の方向を決めた後、謹んで精進するよう皆を励ましました。「あなたたちは幼い時から

親が慈濟でボランティアしてきたのを見ており、親のしていることに賛同しているのであれば、慈濟が向かっている方向が正しいと思っただけです。そして、慈濟に投入することを発願し、共に菩薩道を歩めば、人生の方向は定まり、永遠に後悔することはないでしょう。

「よく若い人が社会に揉まれてくるといふ言い方をしますが、慈濟は正に社会の中に入って人生経験を積み重ねています。苦難にある衆生そのものが菩薩道場であり、そこからこの世の苦難と人生の無常が理解できるようになります」。上人はこう言いました：もし慈濟が自分の一生の方向だと思ふのなら、体で実践し、困難を恐れなければ「甘んじて行い、喜んで受ける」ことができ、また、「甘んじて行い、法の喜びを感じる」こともできます。それは様々な方法で衆生の苦しみを和らげ、衆生を悟りに導くからです。方法が正しいです。

「もし未だに迷いから醒めず、他人の意見に耳を傾けることなく、いつも自分の欲望のままに『好きなように行動』して生き続けるなら、結果としての報いは全て自分が受けることとなります。その時に気が付いても、既に多くの時間を無駄に過ごしてきたため、後悔しても始まりません」。上人は、「智慧を発揮して、慈濟に参加する縁を逃さないようにすることです。この大きな環境の中で自分を充実させて群衆に混じって試練を受けることで、外からの誘惑に負けず、利欲を追求しないようにするのです」と皆に開示しました。

(慈濟月刊六四一期より)

海を渡ってあなたに会いにきました

「ドナーは一九八一年生まれの台湾人男性です」という朗報がもたらされ、首を長くして造血幹細胞の寄贈を待っていた趙鴻雁さんジャオホンインの胸に希望の光が灯った。

「彼は一九八一年生まれで、私は一九八三年生まれ。じゃあ二歳年上のお兄さんだ。身長が百八十センチで、体重が百キロだといいな」。遼寧省大連に住む趙さんは自分一人っ子なので、ドナーの彼を実の兄のように慕っていこうと決めていた。

中国は二〇一九年八月から台湾への個人旅行を見合わせているが、趙さんは万難を排して、遠路はるばる遼寧省大連市から台湾にやって来た。そして

十月十九日のその日に五年間思い続けた「命の恩人」と対面した。この数年間の家族全員を包んでいた暗い気分が一気に消えた。



思いを寄せていたから、距離は問題ではない

趙さんは、骨髓授受者対面式の前日に台湾に着き、翌日は元気な姿で謝意を表そうと思い、睡眠導入剤を一粒飲んで早々と八時に寝た。翌朝シャワーを浴びて化粧をし、最も良い状態で、適合する血液が流れる「台湾のお兄さん」に会う準備を整えた。

彼女は、「お兄さん」が自分より二歳年上だということしか知らず、勝手に兄

●台中静思堂で行われた「影のように離れ得ぬ愛」と題した骨髓授受者対面式。趙鴻雁（右端）は林哲謙（右側から2人目）とその家族の骨髓寄贈同意に感謝した。

の体重が百キロだと推測していた。というのも、提供する造血幹細胞の量はレシピエントの体重に基づいて正確に採取されるため、彼がたくましい体格であれば、気が咎める気持ちが少しは和らぐからだ。

「髓縁」の奇跡を見届ける瞬間が間もなく到来しようとしていた。痩せ型で背が高くハンサムな林哲謙リンジヨウケンさんは妻子と母親を伴って観客席の中から立ち上がった。既にステージに上がっていた趙さんは途端に跪き、林家の人に向かって三回跪拝きはいした。彼女によると、後の二回の礼は一緒に来る縁がなかった両親の代わりにしたのだそうだ。

今回の台湾への旅は、もし中国の中華骨髓バンクと赤十字社の仲介がなければ順調に実現しなかっただろうが、それでも最終的には彼女一人しか来ることができなかった。

「台湾のお兄さん」に思いを馳せる気持ちは、移植を受けて健康が回復するうちに、日増しに強くなっていった。実は今年五月の連休中に、彼女は家族と一緒に福建省廈門へ向かい、「小三通」によって船で來台しようと計画したことがある。そして慈濟を探して住所を教えてもらえば、自ら恩人にお礼をすることができると思っていた。

しかし、一家が廈門に着いた後、台湾

への入国には、通行証だけでなく入国ビザも必要であり、それを取得するのに少なくとも半月から二十日間待たなければならぬことを知った。やむをえず大連の自宅へ戻った。その後ネットを通じて花蓮の慈濟骨髓幹細胞センターと連絡が取れ、今年十月十九日に慈濟台中静思堂で骨随授受者対面式があることを知った。

彼女は「國務院台湾事務弁公室」及び入出国機関に足を運び、自分の置かれている境遇を必死に訴えたが、「これは国家の政策です。あなたの状況はよく分かりませんが、許可を出すわけにはいきません」と言われた。十月八日になってようやく、彼女の申請に特例が下りた。今回の台

湾への旅は彼女が力を尽くして掴んだチャンスだったのだ。白血病を発症した当初からどのように治療するかは、すべて彼女自身が選択したのである。

死ぬわけにいかないから生きる！

白血病を患う前、三十歳になろうとしていた趙さんは、ずっと「人生の勝ち組」の一員だった。りっぱな学歴、安定した仕事、愛する家族、そして大事な赤ちゃんがいた。白血病といえば学生時代に新聞の記事で白血病の子供の可哀想な物語を読んだことを思い出した。そして、大学卒業の年に血液検査をして登録し、中華

骨髄バンクの志願者の一人となった。それが、人助けをする前に自分が急性リンパ性白血病（ALL）の患者になってしまったのだ。

「私の家族には三代遡ってもこのような病気はありません。祖父も祖母も八十五歳以上まで生き、母方の祖母も今年九十二歳で、まだ元気です……」。彼女はすっかり気落ちして世の中が不可解になった。「なぜ私はこんな若さでこの病気にかかったのだろうか。なぜ私なのだろうか」。

いつも元気いっぱい働いていた彼女は、朝から晩まで一日十四時間働いても体力に問題はなかった。以前、白血病と

聞いても、家族の遺伝子だろうし、テレビのドラマで見ても他人の物語としか思えず、こんな事が自分の身に起こるとは想像だにできなかった。

彼女は一人っ子なので「死ぬわけにいかないから、生きるのだ」とよく分かっていた。「私という掌中の玉が生きられなかったら、両親は耐えられず、病に倒れるに決まっている」。そして、たとえば身を傾けても彼女の命を救わなければならぬ、それが家族全員のコンセンサスだった。「車椅子を推すようになるとしても、娘が生きているだけでいい」と当時、既に六十歳を超えていた母親が彼女にそう言った。それを聞いた彼

女は心が痛み、「何がなんでも生き延びなければならぬ。この命は自分一人の

ものではないのだから」と自分に言い聞かせた。



●趙さんは2013年11月に発病し、2014年7月に無菌室に入って移植手術を受けた。拒否反応期間を乗り越え、ついに健康を取り戻して再び家族と暮らしている。息子と幸せな旅に出かけた写真も残すことができた。

（写真提供・趙鴻雁）

ドナーが現れて、九死に一生を得た

発病した時、乳飲み子だった彼女の息子はまだ四カ月だったので、息子の世話には両親に任せるしかなかった。一家が力を尽し、彼女に北京の一番いい病院で治療を受けさせた。夫と夫の両親、それに母親が北京で家を借り、彼女が病気の治療に専念するよう、母は食事、夫は病院関係、夫の両親は孫の世話、と役割を分担した。そして、年若い父は故郷で資金集めに奔走した。

彼女は一人っ子なので、適合する可能性の高いヒト白血球抗原（HLA）を提供する兄弟姉妹はいない。両親は六十歳

を超え、子供はまだ小さい。造血幹細胞移植を行う場合、骨髓バンクでHLA適合者を見つけるしかない。幸いに適合者が中華骨髓バンクで見つかったが、その希望も二カ月続いただけで途絶えてしまった。ドナーとなった相手は考えた挙句、寄贈を拒否したのだった。

絶望のどん底に突き落とされた。さらに医者から相手が拒否したことを伝えられた後で、今度は彼女の母親が卵巣癌を罹っていることが分かった。既に子宮と胃に転移していて、癌を十期に分けたとすれば、既に九期目の悪性腫瘍であると医師が断定した。

希望、失望、絶望が悪ふざけの波のよ

うに順に押し寄せた。その最悪の状態の中で、台湾の骨髓バンクから届いた良い知らせ——一人のドナーが彼女と適合したのだ！しかも二人の血液の適合性が非常に高かったのである。

家族全員が谷底に落ちて再び上り坂を見たような喜びを感じたが、その希望が再びイソップ寓話「オオカミ少年」のようになるのではないかと心配した。しかし、多くの情報が寄せられたおかげでその心配は消えた。「台湾のドナーとの適合ですから、安心してください」。中国本土では数多くの白血病患者が台湾の慈濟骨髓幹細胞センターからの寄贈を受けているが、誰もが台湾人の愛に大きな信

頼を寄せており、移植患者の間では高い評価を受けている。

二〇一四年七月九日、彼女は北京道培病院に入院した。ベッドの上で台湾の見知らぬ命の恩人からの造血幹細胞が一滴ずつ自分の体内に入っていくのを見ていた。その一カ月後、今度は母が北京協和病院で手術を受けた。その期間、二人の世話で人手が足りなくなり、家族全員は実に大変だった。

不幸も行き着くところまで行くと幸運が巡って来るのであろう。どん底からでも生き返ることができるものだ。幸運にも母と娘は共に生き延びたのである。

生きているだけで幸福

移植というこの治療全体はとても高価である。診断を受けた時、医師から「先ず、キーマセラピーで治療し、次に適合した血液を探して移植します。一連の治療には膨大なお金がかかります」と言われたことはつきりと覚えている。

「最低百万人民币（約一億七千万円）、上限はありません」という医者言葉は、最低でも百万人民币かかり、病状と治療の経過によっては費用に上限がないという意味であった。彼女は中学校の物理教師だったので、発病を知った学校の同僚の教師や生徒たちが募金を始め、僅か三十時間あまりで三十三万人民币を超える金額が集まったそう。

退職した教師は千人民币（約一万五千元）、小遣い

を節約して二十万人民币を寄付した生徒、同じように癌の手術をして復帰したばかりなのに直ぐに五百人民币を寄付してくれた同僚、一カ月分の給料を寄付してくれた若い教師等々。誰もができるだけ早く彼女に戻って来てほしいと願ったのだ。

老いた父は家売ったが、資金はまだ不足していた。「私には三人の叔母、三人の叔父、母方にも三人の叔母と一人の叔父がいます」。彼女は、自分の治療のためなら当たり前だと言わんばかりに親族みんなが役割を分担して、全員で懸命に彼女を救おうとしていたことを知っていた。

彼女は中国で人気が高かった「私は菓

の神様ではない」という映画を思い出した。慢性骨髄性白血病の背後にある高価な薬代についてがテーマだった。彼女も、白血病の治療はお金持ちでないと難しく、多くの患者の家族は全財産をなくし、結局、患者とお金の両方ともなくしてしまう人もいることを知っていた。

思い返すと、北京での二年間、家族の家賃と生活費は前後合わせて百三十万人民币（約二千万円）近くになっていた。

いつも元気で楽天的にしている趙さんだが、治療開始当初は全く違っていた。治療の間、彼女は殆ど喋ることなく、人ともコミュニケーションを取らず、ベッドに横たわったまま、母親にも他の人と



慈濟骨髓幹細胞センターの最新統計

2019年10月に272人の患者がマッチングを求めている。

- ✓ マッチングを依頼してきた人の年間累計 **60,199** 人 / 年
- ✓ 寄贈志願登録した人の累計 **440,518** 人
- ✓ 今まで移植した案件 合計 **5,500** 症例。

(2019年10月31日現在)

話さないでほしいと言った。「四人部屋で、隣のベッドの患者が退室したり、新たに入って来たりするだけで苛立ちを感じました」。というのも、病室の隣人の症状と結果は明日の自分に当てはまるかもしれないからだだった。

「あなたはどのタイプの白血病ですか？何回キーマを受けましたか？ドナーは見つかりましたか？移植手術を受けましたか？」彼女の苛立ちのはっきり表に現れ、担当の主治医でさえ彼女の心身状態を心配した。毎回、腰椎穿刺または骨髄穿刺をする時、彼女は痛みを顔に出すわけでもなく、泣き叫ぶこともなかった。「体が麻痺しているように感じました。

うだ。「人は一生懸命働けば、必ず成功できる」とも思っていました」。白血病を罹って、移植手術という方法に耐えた後、「私は今、生きていただけで幸福に感じます」と言った。

彼女は、移植手術を受けて人生を取り戻した当初、マスクを着けて病院の外に出て、「スーパーに行くようになっただけでも、涙が出るほど感動しました……」と言った。病気になる前から、彼女は人に溢れる活気に満ちた場所を懐かしんできた。「生きていることは実に素晴らしい！」

以前は、いわゆる「成功」や「成績優

毎日、私はまだ生きることができるとか、と思いついていたからです」。

病気になる原因は分からなかったが、発病する前のほぼ五カ月間、よく眠れなかった。息子が生まれた時の体重は四キロで、昼間は一時間ごと、夜は二時間ごとにミルクを飲ませなければならなかった。産後のうつ病のように、彼女の精神状態は良くなく、ほとんど休む暇がなかった。「精神的に袋小路に入ったような感じで、やがて体がおかしくなってしまうのです」。

彼女は、自分の人生はそれまでずっと順調で、勝つことしか知らず、失敗してはならないと思うタイプの人間だったそ

秀、「出世」といったことばかり考えていたが、今、それらは彼女の人生のリストには載っていない。「年老いていく両親に寄り添い、息子が成長する過程をこの目で見届けることこそが幸せだと感じています」。亡くなった同じ病気の患者と比較して、彼女は自分が多すぎるほど所有していることを知った。

「人生はその苦痛でわたしの魂に口づけしましたが、私は歌でその恩に報いたい」。趙さんは、インドの思想家タゴールの作品『迷い鳥たち』の名言になぞらえて今の心境を語った。

台湾の空港に到着してから帰国の途に就くまで、彼女が台中や台北のどこにい



でも、慈済ボランティアが同行した。今回の旅は彼女一人に来て、自分の体に適合する血が流れている「台湾のお兄さん」一家に会うことができた。身軽な旅支度でやって来たが、愛をいっぱい持って帰国した。

彼女は既に計画を立てている。政府が個人旅行を開放した時には絶対に大連の家族を連れて、もう一度台湾に來たい！

（慈済月刊六三七期より）

●受贈者の趙鴻雁（前列右から4人目）、ドナーの林哲謙（前列左から3人目）とその家族。授受者対面式があると聞いて全員が大いに喜び、「皆でレシビエントの元氣な姿を見よう」と言った。彼の横に写っている趙鴻雁は、今回の台湾の旅で大家族を得たことを喜んだ。（撮影・廖偉辰）

感動の中にも心残りがあった



文・趙鴻雁
訳・常樸

台湾での授受者対面式の写真を家族に見せると、皆、感激の涙を流してとても喜んでくれたそうだ。ただ、心残りだったのはみんなで出席できなかったことだった。それというのも、お兄さんは一家全員が揃って出席したのに、彼女は一人で家族

を代表するしかなかったのだから。

「今回の感謝の旅は距離が遠く、来るのは容易ではありませんでした。夫は十月二十一日の夜に福州空港に私を迎えに來ました。彼に会った途端、私は涙を流しました。というのも、今回の旅は心を打たれて感動することがとても多かったからです。私は深夜三時まで夫に纏わりついて喋り続けました。私達は他の都市を巡ってから大連へ帰るつもりでしたが、私の心は景色に集中できませんでした。この数日間お兄さんの事が頭から離れられず、夜も夢にまで見る始末で、心が落ち着かなかったのです」。

僕は最高に幸運な人

文・林淑懐（台中慈濟ボランティア） 訳・高雪白

「趙さんが健康で生き生きとして、ここに来ることができたのを見て安心しました。助けてあげられたのも縁であり、彼女にはこれからの日々を、勇気を持って健康に気をつけて子供と家族のために精一杯生きて欲しいと思います」。林哲謙リンジョウケンさんは骨髓バンクのドナーである。自分のレシピエントの話聞いた後で、このように彼女に祝福を送った。

二〇〇八年十一月、二十五歳だった林さんは当時ガールフレンドだった妻と一緒に骨髓バンクのドナー登録をした。採血量は10ccと普通の献血の一袋にも満たない

量だったので気にすることもなく、年が過ぎるにつれて忘れてしまった。

二〇一四年六月、慈濟の造血幹細胞ケアチームのボランティア林香雀リンシャンチュエさんから電話があり、「一人の患者の血液が貴方の血液とマッチしました。患者の容態は思わしくなく、直ぐに移植手術をする必要があります」。林さんは人助けはしなければならぬと当然のことのように思ったので、早速すべての検査と手続きを済ませ、二〇一四年七月に骨髓を提供し終えた。今でも体に異常は全くない。

彼が造血幹細胞を寄贈したことで、母親

は慈濟を理解し、養成講座を経て慈濟委員になった。レシピエントである趙さんから「お母さん、お母さん」と呼ばれた時の喜びは、たとえようがなかった。彼女は「本当に感謝すべき人は嫁の母です。当初彼女が息子と嫁に登録を勧めなかったら、この

縁は結ばれなかったでしょう。息子が人助けする幸運に恵まれ、レシピエントが健康になってくれたことを心から祝福したいと思います」と言った。

林さんは相手の立場に立って善行をした。彼自身、父親が危篤だという知らせを受け、病院に駆けつけた時は既に昏睡状態だったという経験を持っている。医者や「手の施しようがありません」と宣告したその時、彼は立っていられないほどの悲しみに襲われた。身内が亡くなる時、誰かにすがりたい気持ちになるのは皆同じだと思う。そうだとすると人に求められる人間になれたのは最も幸せなことではないだろうか。（慈濟月刊六三七期より）



異郷の父母

文・陳麗安 撮影・顏霖沼 訳・慈願

ネット時代なのだから、遠方の親しい人と顔を見て話をするのは難しいことではないが、外国籍の学生は、自立を選んだ拳句に挫折した時、故郷の家族に心配をかけまいとする。

慈誠パパや懿徳ママは彼らにとって師であると共に友でもあり、台湾の文化に興味を持たせてくれる。慣れ親しんでもらい、生活面と勉強面で支えになるといふ、新しい形の「親子関係」を創り出している。

「初

めは彼らがどんなに良くしてくれても、私は彼らと距離を保っていました」とマレーシアのペナンから来

て、慈済科技大学を卒業間近に控えた蔡胤穎さんは、最初に慈誠パパと懿徳ママに会った時のことをこのように振り返っ

た。なぜなら以前、人間関係で不愉快な思いをした経験があったため、人と人の間は儀礼的な距離を保っていればいいと思っていたからだ。「それなのに、なぜ初対面から親密に私の名前を呼ぶのでしょうか」と彼女は当時の慈誠パパと懿徳ママの情熱に圧倒され、それ以上の交流を拒むほどだった。

同じくマレーシアから来て、現在医学部で造影と放射線科を学んでいる二年生の楊麗敏さんと情報技術管理学科の一年生である陳皆蓉さんは、少し異なった感触を持っていた。

「初めて懿徳ママに会った時、ホーム

シックになりました」。懿徳ママの優しさに母親を思い出した楊さんは、母が側にいるような気がしたそうだ。

「私は彼らの子供になることは幸せだと思いました」。陳さんは、その「パパやママ」とは血縁関係はないが、私心なく付き添ってくれるおかげで、台湾に来て一年足らずにもかかわらず、まるで家にいるような感じになれたのだそうだ。元々、年長者と話が合う彼女は、初めて会った時から慈誠パパと懿徳ママに何でも話せた上、毎月一回の交流時間が長くないため、それを大切にしているのだという。

無私な気持ちで、
今、若い世代に向き合う

楊さんと陳さんが不思議に思ったのは、大部分の台湾人クラスメートが慈誠パパと懿徳ママの情熱に馴染めないことだった。一緒に話し合ったりしないばかりか、簡単なハグにも決まり悪そうにして、ぎこちなかった。

学生の反応が冷淡でも情熱的であっても、台湾全土から集まる慈誠パパと懿徳ママは距離を物ともせず、毎月休みをとって自費で美味しい食べ物を買って持ってきては、終始学生の話に耳を傾けている。

楊さんは、三学期間の交流が終わりに近づく頃、一部のクラスメートが慈誠パパと懿徳ママの心遣いを受け入れるようになったのに気づいた。

蔡さんも慈誠パパと懿徳ママは心から自分たちのことを思ってくれ、自分が話したことを覚えてくれていると感じた。困難にあつた時は客観的なアドバイスをしてくれるので、心を開いて近づくことができるのだ。

現代の通信はとても便利なので、離れた地域や国にいてもネットを通じて速やかに繋がるができる。しかし、故郷を離れている留学生は生活上の困難に直



●マレーシアから来た廖月鳳（右）は、故郷にいる両親には心配をかけたくないという。慈懿会のパパやママが悩みの相談相手である。

面した時、悩みがある時、母国の家族や友人に訴えることをはばかる。学校の制度や進学、就職関連の問題は国によって状況が異なり、話しても解決に至らないのだ。慈誠パパや懿徳ママに相談をうしかなない。

「私は楽しい事しか話しません。親に余計な心配をかけたくないから……」。情報技術管理学科三年生の廖月鳳さんリアオ ユエフオンが言うには、留学生は自分で解決出来ない問題に遭遇した時、直ちにマレーシアへ飛んで帰って相談することもできず、また、故郷の両親に心配をかけまいと思うそうだ。そういう時は、慈誠パパや懿徳

ママで、その存在は台湾における彼女の心の拠り所となっている。

最も身近な人に 優しくすることを学ぶ

多くの青春期にある子供は、目上の人を気遣いたいと思っても、表現することが苦手だ。慈誠パパや懿徳ママと交流する中で、この若者たちは自分と親のやり取りを反省するようになる。

「私は自分の親にもっと良くしてあげなくてはいけない」。廖さんは、家では時々、情緒不安定になって母親に対する

ママ、先生、先輩に相談するのだった。

慈済大学メディア学部に通うタイの留学生、クリト・ジラコッタナクルさんによると、家を離れて問題に出会った時は自分で解決を試みるが、解決が出来ない時は毎月一回の慈誠パパと懿徳ママの集まりの時に相談すれば、何かしら答えが得られ、勉強のプレッシャーからも解放されるそうだ。また、慈誠パパと懿徳ママは台湾の文化や生活習慣も教えてくれると言う。

「慈誠パパと懿徳ママは、台湾の里親なのです」。楊さんは困難にあった時、真っ先に思い浮かぶのは慈誠パパと懿徳

態度が悪かった。慈誠パパや懿徳ママとは親密にしているのに、どうして自分の親に対して良い態度が取れないのだろうか？

楊さんは「家にいた頃は母と打ち解けて話し合ったことはありませんでしたが、懿徳ママの影響を受けて、毎週マレーシアの母とビデオ会話をするようになり、遠く離れていても親子間の親密さは増しました」と言った。

蔡さんは父親が博打にのめり込み、家の中の空気が和やかでないことがずっと頭にあり、大人がよく「愛で以て解決する」と言うのを聞いても、とても現実的



だとは考えられず、「実家では自分がいつも何に直面しているのか理解してくれる人はいない……」と思い込んでいた。しかし慈済科技大学に入ってから、慈誠パパや懿徳ママ、教師、先輩たちが熱心に彼女の境遇に耳を傾け、自分たちの経験も話してくれたため、

●毎月の第3水曜日に慈誠懿徳会のボランティアたちは、台湾の各地から花蓮に集まって慈済科技大学の学生と交流する。その時間は僅か2時間だが、楊麗敏（左から3人目）からすれば、彼らは異郷にいる留学生の心の拠り所である。

彼女と兄弟たちは父親に対する許せない気持ちを変えようと試みた。

或る時、休みに帰国した蔡さんは、妹と動物園に行った時に恐竜の形の帽子を買って父に贈った。いつも亭主関白だった父だが、「その時は小さな贈り物を大喜んでくれたようでした。仕事にも冠って行きましたから！」小さな気遣いを行動に表すと、こんなにも変わるのだ。彼女は家族に対して善行と孝行を尽くし、最も身近な人に優しくすることの意味を知った。

慈誠パパや懿徳ママの年齢層はまちまちなので、このように異なった世代の人

たちが出会った場合、価値観の共有や交流にはやはり時間が掛かるかもしれない。ただ、蔡さんは、慈誠パパや懿徳ママの豊富な人生経験に触れてたちどころに問題が解けたことで、自分のような若い世代にとって「とてもためになる」と思えたのだそうだ。

交流する中で、若い世代は年長者を尊重することを学び、年長者は自らの貴重な智慧を財産として伝えていくことができる。慈誠懿徳会は世代間の隔たりを縮め、いつのまにか社会と家庭の協調を取り持っているのである。

（慈済月刊六四〇期より）

慈濟大記事五月……………

訳・済運

05・01	<p>慈濟基金会は新型コロナウイルス（COVID-19）の感染予防措置として、オンライン勉強会を催しているが、今回は「慈濟オンライン灌仏会」を計画し、本日より31日まで民衆をオンライン灌仏会に招待し、敬虔な祈りで以て感染症の終息を願う。</p>
05・05	<p>◎慈濟基金会と世界医師連盟（MDM）は新型コロナウイルス（COVID-19）感染予防で国際間の協力を展開する。5日から18日までニジェール、マダガスカル、ベニン、ブルキナファソ、チュニジア、ボスニア等6カ国の世界医師連盟にマスクを寄贈して現地の防疫に役立つ。</p> <p>◎慈濟ニュージーランド支部は防疫物資を支援する活動を始めた。地域病院や診療所、警察、税関、寺院、現地の台湾人懇親会や団体に対</p>

05・07	<p>慈濟ミャンマー支部は7日から貧困救済活動を展開する。ヤンゴン省、タイチー、モウビ、トングアなどで感染予防期間に食糧が底をつく世帯が困難な時期を乗り越えられるよう、米と食用油を配付した。</p>
05・08	<p>◎モザンビークの慈濟ボランティアは政府の緊急救済センターからの支援要請を受けて、南アフリカから送還された300人余りの出稼ぎ労働者に食糧を配付すると共に、避難所の職員にマスクと手袋、防護服などの感染防止用品を提供した。</p> <p>◎ハイチの慈濟ボランティアは8日と13日にそれぞれ、ポルトープランスのセント・カミール病院とサンフランシス病院を訪れ、マスクと隔離服など感染予防用品を届けた。</p>

05・11	
<p>◎慈済基金会はフランスで新型コロナウイルス（COVID-19）の感染予防策として、本日よりマスクをパリ、ロモランティン、ソローネ、バスクなどに送り届け、現地政府や療養所、医療施設などを支援した。</p>	<p>慈済の灌仏会に参加した。</p> <p>◎日本は新型コロナウイルス感染状況が厳しさを増す中、政府が緊急事態宣言を発令し、国民に集会と不要不急の外出を控えるよう呼びかけた。慈済日本支部は、その措置に合わせて今年の灌仏会を大愛テレビの実況放送とオンライン灌仏会の2つの方法に変更し、広く民衆に参加を呼びかけた。</p> <p>◎慈済アメリカ総支部はロサンゼルス地域フードバンク (Los Angeles Regional Food Bank)、アメリカ味全食品公司 (Wei-Chuan Food Corporation USA) 及び食物配送機構 (Food Forward) と協力して、慈済ウォールナット教育センターで1016世帯の低所得者に野菜や果物、食品を配付した。</p>

05・10	05・09
<p>◎慈済54年目の三節一体灌仏会の「仏誕節、母の日、慈済の日」行事は、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大に配慮し、通常、花蓮靜思堂や中正記念堂などで行われる活動を取り止めた。今回初めて靜思精舎と台北の臨濟護国禪寺を会場として実況放送し、62の国と地域の延べ52万人余りがオンライン灌仏会を通じて、仏の恩に触れ、疫病の早期終息を願った。今回はインドとロシアの会員が初めて</p>	<p>◎ハイチ慈済ボランティアは現地時間の9日（台湾時間の10日）、グロバルオンライン灌仏会に参加すると共に、ボランティアの張永忠さんとルジ神父が先頭に立って、敬虔な朝山（一歩ごとに礼拝する）活動を行なって疫病の終息を祈った。</p> <p>◎フィリピン、オルモックの慈済ボランティアは政府の新型コロナウイルス対策の規制措置に呼応して、移動式灌仏会車輛を作成し、政府の許可を取得した。本日よりオルモック大愛村で灌仏会に参加する住民を招待した。</p>

	<p>基金会は初めてネットで繋ぐ役割を担った。国連やアメリカ仏教界の法師たち、社会大衆と「仏教慈悲の行動、COVID-19感染予防」に関する討論会を開き、世界5大大陸の434人がオンラインで参加した。</p> <p>◎慈済アメリカ総支部黄漢魁副執行長は要請を受けて、12日から17日までオンラインで「2020年グローバル災害防止サミット」に参加する。また本日、新型コロナウイルス感染症を例にとって、仏教精神で大衆の愛を啓発し、それを結集して感染予防支援の役割を担ってきた慈済の経験を報告した。</p> <p>◎慈済大学は慈済の環境保全30周年に際して、本日より12月31日まで再び、「菜食go easy祝福券」活動を展開する。慈済ボランティアは祝福券を政府機関や学校、社会大衆に配付し、世界のために菜食を広め祈りを捧げる。</p>
05・14	

	<p>◎慈済大学と中央研究院、台北慈済病院は「COVID-19協力プラットフォーム」を通じて「新型肺炎IgM、IgG抗体検出試薬」を共同で開発する。それによって迅速にIgMとIgGの2種類の抗体を検出することで、新型コロナウイルス（COVID-19）に感染したことがあるかどうかや感染の既往が分かるようになる。</p> <p>◎慈済基金会の「Fun広い視野で未来に向かおう」と題した青年イノベーション推進プロジェクトは、慈済科技大学と共同で「第4回国慈悲の科学イノベーションコンクール」を催す。本日、台北市政府でプロモーションのための記者会見が行われた。今回初めて台北市政府教育局と合同で行うことになり、慈善公益の実践における科学技術教育の向上を目指している。</p> <p>◎2020年国際ウエサク祭がアメリカ仏教協会の主催で行われ、慈済</p>
05・13	

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2020年6月17日発行・282号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



菜食を始めるのは今からでも遅くない 家で祈る

フィリピン政府は新型コロナウイルス感染症の拡大を抑えるために、コミュニティ隔離政策を強化した。オルモック市にある大愛村の1500世帯の住民は、多くが外に出て日雇いの仕事や物売りをする事ができないため、食糧が底をつきはじめた。慈済は緊急に食糧を購入して配付した。その時慈済青年ボランティアは、ビールを配って村民に菜食を勧めた。村民は快く受け入れ、菜食することで敬虔の念を表し、疫病が早く終息するよう祈った。(フィリピン・レイテ州オルモック市 2020.3.22)

(文、撮影・アモス・マトウガス)



慈済日本サイト



慈済ものがたり